

り、日本のものはその極端形であることになる。同一種類の地理的変異とみなすのが適当である。

5) *Vandellia laotica* はアゼトウガラシ節 (Sect. *Angustifoliae*) のものでシマウリクサ (*V. cordifolia*) に似た種類である。最も近いのは浙江省から報告された *V. brevipedunculata* であるが、欧文に記したようなはっきりとした違いがある。貧弱な資料があるだけなのでこれらの種類の関係はまだはっきりわからない。

6) 台湾北部の高山にはえるイコマソウはヒマラヤから中国西部にひろがり 10 種類ほど知られている *Lyratae* 節のもので特殊な形態のシオガマギク属の種類である。能高山、南湖大山、大霸尖山、次高山が産地として知られ、大霸尖山が基準標本の産地である。今まですべて一種類とされているが、大霸尖山のものと南湖大山のものとを較べるとかなり異っている。南湖大山のものは葉が小さく下面に長白毛がある。包葉は小さくがくと同長かやや長い程度である。がく筒は短毛が散生するにすぎない。花冠上唇は細長く先は次第にほそまり、先端に歯牙がある。大霸尖山のものは葉は大きく裏面はほとんど無毛であり、包葉は大きく花とほぼ同長、がく筒は長白毛があり、花冠上唇は先端急にほそまり、先端に歯牙をもたない。こうした点から種類としてわけるのが適当と思う。次高山のものは大霸尖山に近いものであろう。能高山のものは場所からいって明らかにイコマソウと異と思うが標本をみていないので不明である。

Kew 植物園から標本をかりるのに便宜をはかっていただいた原教授に深謝します。

□ Penn State-In-China Committee: **Report on the G. Weidman Groff Collection** 28×22cm pp. 510 (1961. Dec.) The Pennsylvania State University, University Park, Pennsylvania. Groff 教授はペンシルバニア大学を卒業した園芸学者であって 1907 から 1947 まで広東の嶺南大学に勤務しそこの農務部長であった。氏ははじめ亜熱帯の支那の植物に多大の興味を抱き、その種属誌を出版したい考えでその準備として大きなメモカードを作り出した。大綱を Dalla Torre の *Systema Phanerogamarum* にとり、数千枚を越える属のリスト、さらに個々の種についてのカードも用意し、それに必要な項目をぎっしりと書き込んだ。p. 12 にそのサンプルが出ているが A 6 版大のカードに一杯の文字が並んでいる。その片面は主に関係文献の略記であるが、裏面には氏が直接経験した種々のデータも加えられた。後には近接地域の熱帯亜熱帯の植物の属種も加えられて益々庞大となった。1954 年 12 月氏の没後その寄贈と遺囑を受けた Penn. State 大学では委員会を作り、これらを活かすために整理をした。その間の経過と Dalla Torre による前の方の一小部分即ち裸子植物全部と単子葉の小部分トチカガミ科までを留学中の T.H. Chen 君が整理した部分を活字にしてあるのが本書である。氏の独自の観察記録の部分が活字になっているならばこれは一層有益であろうが、引用文献が剰長であったり比較的知られていることが述べられた部分だけが印刷されたのは量と費用の割にもったいない感じもする。ともあれ、これと未発表の整理されて同大学図書館にあるカードは南支の植物を知りたいものに役立つと思い、紹介した。と同時にメモを作る人達にとって心血をそそいだメモが死後にどうなるか、またどうあるべきかを考えさせる資料ともなる点でも紹介したものである。(前川文夫)